「伊豆の踊り子」の作者である川端康成の短編に「十六歳の日記」という作品がある。

二歳で父が死に、三歳で母、七歳祖母、十歳姉、十五歳祖父。川端少年の周囲には過酷なまでに「死」がおしよせた。天涯孤独という言葉は川端康成の少年期そのものだったにちがいない。

家族が皆いなくなり、たった一人で看護し、看取った祖父との最後の日々を書き残した作品が「十六歳の日記」である。風が揺らす梢の葉音にも命を感じるような繊細な神経の持ち主であったにちがいない川端少年にとって、次から次に直面する「死」は、「生きることの意味」をより深く精神の根底に潜めさせたにちがいない。そして、その苦しさに耐え、耐えきることによって昇華したものが川端文学といえるだろう。「死」は何物よりも重かったのである。

男23・9歳、女37・5歳。終戦の年の平均寿命である。二年前のデータで恐縮だが、今や平均寿命、男77・16歳、女84・01歳。命はまちがいなく重いものになったことを数字は示している。がしかし、命をあまりにも軽いものとみなす事件が頻発するのは何故なのだろうか。

坂の上の雲を見上げて、必死になって走り続けてきた日本。モノがあふれ、生活は豊かになり、自由も平和もありふれたものになった。それだけにまた、失うことの恐ろしさも忘れられつつあるのだろうか。

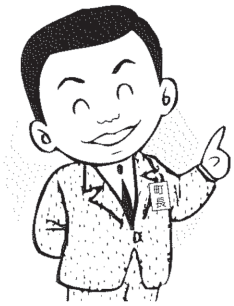
パソコンの中には情報が洪水のようにあふれ、戦争も「死」も何もかも子どもたちは知っている。しかしまちがえては欲しくない。そこにはナマの現実は無いのだ。バーチャル・リアリティーなる仮想現実があるにすぎない。「生と死」はリセットして元に戻すことなど出来ないのだから。

私たちは今、「死」を生活の中から追放してはいないだろうか。「死」は病院とプロの式典業者がきれいに飾ってくれる祭壇の向こう側にしかないのだろうか。

ひとつの卵に醤油をかけ、分け合って食べたかつての時代。そこにはまちがいなく家族があり、「死」は重いものだった。

もちろん、貧しかったその時代に戻れというのではない。しかし、次から次へと少年の起こす「生命」にかかわる事件を知るたびに、あまりにも軽くなってしまった「死」を、この風化を、どのように食い止めればいいのだろうかと重い悩むのである。

残念ながら今の私に、その「答え」は無い。

ただ、オロオロと歩きまわるだけなのである。

町長　記